

## 平成 27 年度 学部 FD 推進事業報告書

標記のことに関し、以下のとおり報告いたします。

| 学 部 名  | 文学部                  |
|--|----------------------|
| 事 業 名  | カリキュラムおよび授業改善の基本方針検討 |
| 平成 27 年度実務担当者名   | 白井 重範                |
| 事 業 の 概 要  |                      |
| <p><b>【計画性】当初計画通りに事業を推進できたか？</b>（いずれかにチェック）</p> <p><input type="checkbox"/>計画通りであった <input checked="" type="checkbox"/>概ね計画通りであった <input type="checkbox"/>あまり計画通りではなかった <input type="checkbox"/>計画通りではなかった</p> <p>（以下、<b>本年度の推進事業の概要</b>について、年初「申請書」の「内容」「目的」「計画」、及び前記【計画性】の自己評価、さらに別添の「経費執行表」における予算の執行結果に照らして記入してください。）</p> <p>平成 27 年度「学部 FD 推進事業」において、文学部は FD アンケートを実施するとともに、文学部教務委員会において授業改善とアクティブ・ラーニングをめぐる諸問題について意見交換会を行った。具体的内容は、以下の通りである。</p> <p>1. FD アンケート</p> <p>昨年度まで、学生対象アンケートは後期授業期間に実施していたが、今年度はアンケート結果を各学科の授業改善に反映させるべく、前期授業期間終了前に実施した。質問項目は、昨年度までの結果で学生の満足度が高い学科専門科目、満足度の低い英語関連科目に関して、その理由を明らかにすべく変更を加えた。</p> <p>アンケートは授業中に紙ベースで実施し、文学部 5 学科合計で 1200 枚の回収を目指した。回答数は 937 枚で、回収率は 78%であった。学科ごとにアンケートを実施する授業を選び、可能な限り学年による偏りが出ないように努めた結果、1～3 年生が 27.0～29.5%、4 年生が 15.3%と、偏りは低く抑えられた。</p> <p>アンケートの集計結果は、業者より平成 27 年 10 月に納入され、文学部教務委員会において内容の分析が行われた。以下、特記すべき事項について述べる。</p> <p>（1）学生満足度の高い授業の傾向</p> <p>文学部全体では、学科の専門科目の満足度が高い（外国語文化学科のみは、選択必修外国語科目の満足度が専門科目を上回った）。その理由として、「授業のテーマに興味があること」を選んだ学生が最も多く、「重視する」「やや重視する」を加えて 88.3%に上った。それに次いで「驚きや発見があること」（同 77.0%）、「講師の人柄や教え方」（同 73.4%）が重視されている。一方で、「授業が行われる校舎・教室」はあまり重視されておらず（同 27.9%）、「卒業後の進路に直結していること」（同 42.1%）も満足度には大きく影響していない。「基礎学力の養成につながること」（同 71.0%）、「専門</p> |                      |

的な学術研究に触れられること」(同 69.7%)、「授業が行われる時間帯」(同 66.3%)が一定程度重視され、「単位が取得しやすいこと」(同 58.2%)、「授業内容が簡単で理解しやすいこと」(同 57.4%)を上回っている。

授業の内容のほか、授業形態に関する自由記述欄には、「少人数制」を歓迎する内容が多く、「ディスカッション形式」を好む者も見受けられる(一方、中国文学科には「演習形式」と「大人数制」を歓迎する意見も他学科より多く見られた)。

以上を総合すると、文学部には、あらかじめ一定の志向性を有する学生が多く、学びたい内容を学ぶために入学するという傾向が今なお根強いことがわかる。その上で、学生自身が持つ知識をより高い次元へと導くような授業が歓迎されている。いわゆる専門志向が強いということができ、これは本学文学部の強みとなりうるが、一方で卒業後の進路への関心が必ずしも強くないことがわかる(中国文学科のみは、60.9%の学生が「進路に直結」を重視している)。

## (2) 学生満足度の低い授業の傾向

昨年引き続き、満足度が低い科目として、教養総合英語科目が挙げられた。満足だと答えた学生は17.9%であったのに対し、35.7%が不満を表明している(ただし、「普通」と答えた学生が40.8%で最も多い)。自由記述欄に寄せられた理由としては、「基礎的すぎる」「実用的・実践的でない」が多いものの、学科によってばらつきが大きく、他の要素も勘案すべきであろう。つまり、上述の「満足度の高い」授業に見られる特徴が、教養総合英語科目には希薄である点が重要であると考えられる。一定の志向性を持って入学してくる文学部学生は、もともと興味のある内容をより深く学びたいと考える一方、専攻分野に直接リンクしない科目を敬遠しがちであり、卒業後の進路についてはひとまず留保したまま、興味のある学問分野に没頭したいと考える傾向がある。そのため、高校までの学修の継続あるいは反復と見なされかねない授業を必修として強いられることを嫌う。

従来のFirst Year English、English I、English IIは、平成29年度より外部業者への委託が予定されている。そこにおいて、文学部学生に汎用的スキルとしての英語を身につけさせる充実した授業運営が為されることを強く希望するとともに、文学部においては独自の科目を設けることで、英語と専攻分野との接続を実現したい。つまり、いわゆるリメディアル教育としての(大学生あるいは社会人として最低限必要な基礎的内容の定着を第一の目的として運営してきた)英語教育は原則として外部業者に任せ、各学科の学びを強く意識した英語科目の創設することである。これに関しては、平成28年度早々にも具体的内容の検討に入りたい。

## (3) 全体を通して

今回のアンケート結果を、授業改善およびカリキュラムに活かすための提案を二三行いたい。まず、学生の志向性に応える「専門性」の維持発展である。文学部5学科のうち、外国語文化学科を除く4学科は、学科専門科目に対する満足度が高く、この点は我々が誇ってよい点であろう。様々な改革を進めるにあたっては、高い専門性とそれに対する高い満足度を損なうことのないよう、注意が必要である。その一方で、卒業後の進路により多くの意識を向けさせること、学士課程教育において、社会人としての基本的スキルを身につけさせることもまた重要である。前者を維持発展しつつ、後者をいかに充実させるかが課題となる。

授業改善については、文学部では授業内容そのものもさることながら、教員の信頼性が満足度の大きなファクターとなっていることを意識しつつ、授業担当教員の自助努力を促すとともに、文学部あるいは各学科における相互チェック機能を構築することも必要であろう。

なお、外国語文化学科は学科専門科目への満足度が必ずしも高くない。それは、外国語運用能力の向上を目的として入学してくる学生が多く、文学部の中では比較の実学志向が強いことが理由として考えられる。また、少人数のディスカッション形式による授業形態を好む傾向があり、学科カリキュラムにおいては、①実践的な外国語コミュニケーション能力の向上をはかる科目、②比較的少人数(25人程度)の演習科目を充実させることが目指される。さらに、半期1単位科目や通年科目の撤廃あるいは削減を通して、学生の負担を軽減することも必要であろう。

## 2. アクティブ・ラーニングをめぐる諸問題

齋藤智哉氏（文学部准教授・文学部教務委員）の論文「アクティブ・ラーニングの行方―「協同的学び」による初等中等教育と高等教育の接続―」（『國學院雑誌』第117巻第2号）をめぐる、文学部教務委員会において意見交換を行った。詳細は下記の通り。

日時：平成28年3月9日（水） 文学部教務委員会終了後

場所：会議室01

参加者：文学部教務委員

「アクティブ・ラーニング」の定義と、それが高大連携という動きの中で進められていることについて、齋藤氏から紹介があった。大学（高等）教育で推進されている「アクティブ・ラーニング」（広義および狭義の）が陥りがちな事例をふまえつつ、より有意義かつ本来の意味に即した運用に向けて、意見交換がなされた。

## 3. その他

アンケート対象者（学生数）を増やすことを目的に、1,000,000円の予算を申請したが、業者の提示した見積額が予想を下回ったため、648,000円に減額補正した。